

【追加資料】

明応四年八月十五日（西暦一四九五・九・一二）の地震と津波について

——鎌倉における風評被害——

浪川 幹夫

四^{乙卯}八月十五日大地震洪水、鎌倉由比濱海水到千度檀、水勢大佛殿破堂舍屋、溺死人二百餘、

これは、彰考館文庫本の年代記『鎌倉大日記』の明応四年（一四九五）八月十五日の記事である。

平成二十三年（二〇一一）三月十一日の「東北地方太平洋沖地震」以降全国の沿岸地域では、今後発生し得る大津波について最大到達高や浸水域の「想定外」をなくす動きが活発化した。神奈川県も例外でなく、この年同県では、急遽その想定作業を実施した。県は想定にあたり、冒頭示した『鎌倉大日記』の記事をその根拠のひとつとして、鎌倉での想定津波到達最大高を「明応型」とした地震で一二・三〇^{メートル}とし、さらにもう一つ、「慶長型」としたもので一四・三九^{メートル}とした。そして、このあと発表された内容などによって、「大仏殿」が明応四年の津波で流失したとするような風説が一気に広まったことは記憶に新しい。

では、最初に示した『鎌倉大日記』の記事は、はたして明応四年当時に「大仏殿」が津波で流失したと解釈できるものなのだろうか。そこで、この記事をもとに検討すると、まず「千度檀」については京都・相国寺の元禅僧万里集九（一二四二八～？）の『梅花無尽蔵』文明十八年（一二四八六）の記に

透^ニ千度小路^一。謁^ニ鶴岡之八幡宮^一。（中略）千度壇連^ニ七里濱^一。

また、鶴岡八幡宮相承院の供僧快元（一二四八七～？）の同宮造営記『快元僧都記』の天文三年（一五三四）六月十六日条に

鶴岳八幡宮七度行路^并下馬橋^ニケ所欲^ニ修治^一勸進之狀。

とあるところから、これら「千度小路」「七度行路」は若宮大路、「千度檀」は段葛ではないかと推定されている。ただし、若宮大路については、昭和三十七年（一九六二）に行われた下水道工事により現地表下約一^{メートル}に鎌倉時代の遺構面が認められ（現在の海抜は二ノ鳥居前で六・〇^{メートル}である）、市立体育館前（由比ガ浜二丁目一番先）で実施された発掘調査で推定中世路面が海抜約四～六^{メートル}の高さで確認されているので、たとえ津波がここに襲来したとしても、想定する到達高

であつたかは判らない。⁽¹⁾

次に、「大佛殿」は、西御門の報恩寺（今は廃寺）の開山で瑞泉寺と黄梅院に住した禅僧義堂^{しやうしん}周信（一二三五～八八）の詩文「宿^ス相之大佛寺^ニ」によると、「相の大仏寺に宿す 義堂 早歳（若い歳）曾^{かつ}て遊びて甲子（の）日（吉日）頻^{しきり}なり。（中略）寺は海岸に瀕^{ひん}して、松を吹きて激^{なだすな}し。潮は灘沙^{しりぞき}を退て月を送ること長し」とある（『新編鎌倉志』巻五「〇大仏 附切通」所収）。

師の詩は「相之大佛寺」が「寺ハ瀕シテ海岸ニ、吹テ松ヲ激シ」としており、この語によつて「相之大佛寺」（「大佛殿」）の境内は、師が鎌倉に住した延文四年（一二五九）から康暦元年（一二七九）の頃に、海岸近くまであつたと解釈できる。そして、『三嶋神社文書』の応永四年（一二九七）九月九日「伊豆守護代（寺尾憲清）奉書」に「大佛寺雑掌」、同社文書の同五年閏四月二十八日「鎌倉公方（足利氏満）御教書」に「鎌倉大佛寺」と記されており、大仏尊像及びその周辺は、中世のある時期寺院として「大佛殿」「相之大佛寺」「鎌倉大佛寺」などと称されていたことが考えられる。そこで、『鎌倉大日記』の「水勢大佛殿破堂舍屋」を素直に読むと「水勢大仏殿の堂・舍屋を破る」であり、「大佛寺」などと呼ばれた寺院境内の、

いずれかの建物が流されたとするのが自然となる。

その上、尊像や「大佛殿」については、文明十八年十月二十四日に万里集九が当地を訪れた際のこととして、自著『梅花無尽蔵』に、銅造大仏の胎内で昼間から賭場が開かれているという伝聞のほか、この時既に堂（大仏殿）はなく尊像は露坐であつたことを記している。そのため、明応四年の九年前には建物としての「大佛殿」は存在していなかったと解釈できる。⁽²⁾

さらに、明応四年八月十五日の地震については、『晴富宿祢記』のほか『後法興院記』^{*}など京都方面には記録があるが、関東地方では『鎌倉大日記』の記事のみである。

津波は、海岸近くまで広がっていた「大仏殿」という寺院境内の、どの地点に達したのだろうか。今後起り得る地震や津波などの規模想定の根拠として、年代記などの編年史料を用いる際は、よほど慎重に扱わなければ危険である。

〔本稿は、内閣府二〇一三『一七〇三 元禄地震報告書』所収「第十章まとめ（災害教訓）」の、拙稿「鎌倉地方における近世及び近代の大地震から得たもの——『歴史地震』の正しい認識から——」を修正のうえ、掲載した。〕

(1) 白井永二一九六三「段葛考」『鎌倉』九／

鎌倉市教育委員会二〇〇〇『国指定史跡若宮大路遺跡発掘調査報告書』X 公共下水道（汚水）築造工事（中間バイパス幹線埋設）に伴う立会い調査

(2) 神奈川県立金沢文庫二〇〇二 鎌倉大仏建立七百五十年記念特別展『鎌倉大仏と阿弥陀信仰』／市木武雄一九九三『梅花無尽蔵注釈』一 続群書類従完成会

※『晴富宿祢記』は、室町時代の官人壬生晴富（一四二一～九七）の日記。また、『後法興院記』は、室町時代後期の関白・太政大臣近衛政家（一四四四～一五〇五）の日記である。